

途上だより

倉橋生

○はぐみ

不意に子どもの泣き聲がしたので、読みかけて居た雑誌から目を移して車内を見まはすと、其の泣き聲は、むかふの隅に居る若いおかみさんの背の子から起つたのであつた。おかみさんは手を後ろへまはして、頻りに揺つて見るけれども、どうも泣きやまない。愈々はげしく泣き出すばかりである。おかみさんはとうとう子どもを抱きおろして膝の上へかゝへて、いろいろあやしても中々泣きがとまらない。若いおつかさんは殆んどもてあまして閉口して居る。

私の一人おいて隣に、まだ若い尼さんが居た。さつきから優しい顔で此のさまを見つめて居たが、つと立つて彼のおかみさんの傍へ行つた。おつかさんと軽くその子どもの頭を撫でながら、袂か

ら小さい菓子を取り出して與へた。此の尼さんは子どもに對して特別なやさしい手練をもつて居るのか、子どもは直ぐに泣きをやめた。

おかみさんは喜んで、子どもと二人分の禮をのべた。尼さんは其の隣へ腰をおろして、なを子どもをあやしながら話出した。

「私は子ども衆が大すきで、いつでも外へ出ます時には、きつと袂へお菓子をに入れてあるきます。

ほんとに子ども衆位いゝものは御座いませぬねえ。私は衣の身で生みの子は御座いせんが、我家には可愛いゝのが三人待つておいでいす。ぼつちやんなんかは、いゝおつ母さんがおありで結構で御座いますがねえ……」

電車はとまつた。丁度乗りかへなければならんで、私はそこで降りた。

私の大すきな名書の一つに、ミレーの描いた「はぐみ」と題する畫がある。田舎家の裏口に、子

どもが三人腰をかけて居て、一人の尼さんが匙で何か盛つては食べさせて居る。左の子はもう食て終つて満足顔をして居る。中の子は今しも匙を出された處で、小さい口をあけて、丁度母鳥を迎へた巢の中の仔鳥の様な口つきをして居る。一番右の子は、自分の番を待ち兼ねるやうに自分も譲らずく口をあけて居る。春の日か秋の日か、かいんで居る尼さんの背を照して、穏やかな平和が畫一面に充ちて居る。

私は其の日歸つて直ぐ此の畫をとり出して見た。あの時の話の様子から見ると、あの尼さんは三人の孤兒をそだて、居るのではあるまいか。若い尼さんと三人の孤兒。私は今でもあの尼さんの處へ此の畫を持つて行つて上げて來たい氣がする。

○お父さんの成功

十歳ばかりの男の子、お父さんに手をひかれて公園を散歩して居たが、何か前の方に面白いもので

もあつたとみえて、つか／＼と三四間さきへ獨りで進んだ。するとお父さんは笑ひながらつと身をかかわして、道の傍の櫻の木の下へかくれて仕舞つた。子供は氣がついて後をふりかへつて見ると、お父さんが居ない。大事なお父さんが居ない。可愛らしい眉のあたりに次第に不安の雲が深くなつて、あちこちと見まはすけれどお父さんが居ない。櫻の木の後ろではお父さんが可笑しさをこらへてコツ／＼と樹の幹をたいて聞かせるけれどまだ分らない。子供はちよ／＼と驅け出しては探すけれど見つからない。不安の雲はそろ／＼雨になりさうな恐れがある。こんどはお父さんの方でたまたまなくなつたと見えて、持つて居たステッキの先きへ山高帽子をのせて、櫻の樹の横へぬつと出した。

之れは上野の博物館の附近で見た快い一幕であるが、發見して喜ぶ子供と、發見されて喜ぶお父さんと、互に快く笑ひながら、前よりも堅く手